

関東大震災を乗り越えた本店本館

日本銀行文書局技師 中村茂樹

日本銀行本店の本館建物（以下、「本館」）の歴史を語る中で避けて通れないのが関東大震災による被災の話です。今年の三月十一日に発生した東日本大震災は東北地方を中心に未曾有の被害をもたらしました。被災された方々には心からお見舞い申し上げます。今回の震災が起こるまでは関東大震災は遠い過去の出来事ととらえがちでしたが、今は身近なことに見えてくるのではないかと思います。上の写真はドーム屋根が無残に焼け落ちた「本館」の被災の様子を写しています。写真からはドーム屋根以外の損傷はほとんど見えませんが建物の中は類焼により大部分が焼けています。今回は、震災復旧の資料をもとに被災から生まれ変わる「本館」の様子をご紹介します。



被災した本館建物外観

北分館の建設

大正十二年（一九二三）、この年日本銀行本店の建物に新たな時代が始まろうとしていました（図1）。

東分館（明治三十四年（一九〇一）築）以来久々の分館が大正八年（一九一九）に起工され、この九月の完成を目前に控えています。

した。長野宇平治（写真1）の設計による北分館（写真2）です。建物構造はレンガ造りから鉄筋コンクリート造りに変わり、建物の規模も業務の拡大に対応すべく七階建ての事務スペースを擁する待望の建物でした。

「本館」の向かい側でも同じ長野の設計による横浜正金銀行東京支店（注1）が新築工事中であり、

この年の二月には東京駅前九階建ての大型事務所ビルが完成して話題になっていました。最近まで丸の内オフィスの象徴であった初代丸ビル（注2）

です。そのような年の九月、東京の町並みを一変させる災いが起きました。

本店の被災

九月一日（土）の午前十一時五十八分、マグニチュード7.9の巨大地震が関東地方を襲い、東京と横浜市内の多くの建物が瞬時に倒壊し、各所で発生した火災は折からの突風にあおられて瞬く間に広がっていきました。

日本銀行本店の建物はいずれもこの地震での倒壊を免れました。

日本銀行は各建物の無事を確認し、月曜日以降の緊急措置の手

はずを整えた上で、約六〇名の臨時宿直員を残して夕方に業務を閉めたものの、被災はこの後に起ります。

同日午後七時頃、印刷局等の敷地西方面からの火災が西分館と、さらに敷地東側の東分館の内部を焼き尽くしました。それに前後して三井側からの火災により、三井銀行、旧南分館、工事中の横浜正金銀行、三越呉服店等が類焼し、



写真1 長野宇平治
慶応3年（1867）越後国高田に生まれる。帝国大学工科大学を明治26年（1893）に卒業後、奈良県庁技師嘱託を経て、明治30年～大正元年（1897～1912）日本銀行技師・技師長。震災復旧設計後、再び日本銀行技師長に復帰。わが国屈指の古典主義建築家として知られ、日本銀行本店を始めとする数多くの銀行建築を手掛けた。（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）



写真2 北分館被災後の外観写真（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

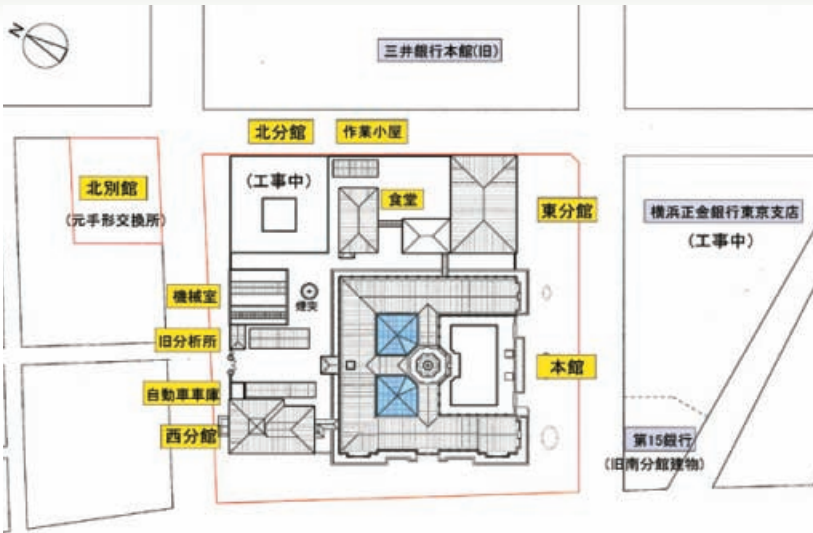


図1 大正12年(1923)被災時の本店(日本橋配置図)



写真4 「本館」営業場柱の被災。細く焼け残った柱の両脇を木製柱で応急補強(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



写真3 「本館」3階事務室の被災(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

さらに本館前庭に避難していた荷車等にも延焼し、「本館」の全周が猛火で包囲される事態となりました。

二日未明、突風にあおられた火炎がついに本館ドーム屋根を溶かし、二階八角室へ落ちた火炎がたちまち三階の大部分を焼き尽くしました(写真3。「本館」にとどまっていた約六〇名の宿直員は営業場西側の窓を開けて西方空き地に何とか避難することができました。

窓の開いた営業場西側から客溜上部のガラス屋根へ抜ける猛



写真6 西分館の焼失(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



写真5 上空から見た本店被災状況(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

烈な火炎は営業場の柱を十分の一くらい細くまで焼き尽くしたと記録されています(写真4。今思えば「本館」倒壊の危機も迫っていたこととなります。

その中で行われた必死の消火活動が功を奏し、地下の金庫室への延焼は免れました。建物全体に火が回らなかったのは、床がすべてコンクリート製の防火床であったためだと思えます。

写真5は上空から撮った被災状況です。右下に「本館」、その右上に東分館、「本館」の左下に西分館が見えます。また、「本館」左上に白く四角い建物がありま

すが、これは七階建てとして工事中の北分館です。

東分館と西分館の屋根が完全に抜け落ち建物内部が見えています。これは建物の屋根や床が木造だったため壁以外がすべて燃えてしまったからです(写真6)。

こうした未曾有の火災を被ったものの日本銀行本店は翌月曜日は業務を行っています。関東大震災の時でも一日も業務を止めていないのは、日本銀行にとって一つの誇りではないかと思えます。

「本館」の焼失箇所。赤色は焼失箇所を示す

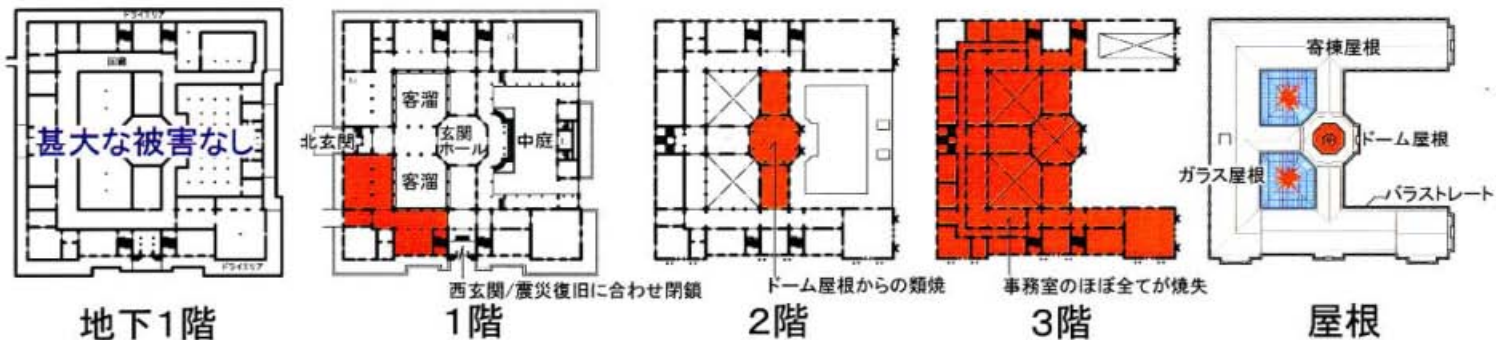




写真8 バラストレート。円形線形の装飾柱を用いた屋上手すり



写真7 「辰野記念 日本銀行建築譜」(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

「本館」のもう一つの損失

関東大震災による焼失は、建物だけではありません。「本館」の類焼によって数多くの貴重な資料が焼失しました。「本館」の設計図等の建築関係資料もその一つです。

震災の四年前、大正八年(一九一九)に辰野金吾が亡くなりました。そこで、同氏の功績を後世に伝えるために、代表作の日本銀行本館の設計記録を刊行することになりました。その編さん作業が「本館」で行われ、まさにその時震災を受けました。一カ所に集められた設計図を始めとする貴重な資料が、「本館」の中ですべて焼失してしまつたのです。



写真9 「本館」屋上の被災。焼失したドーム屋根とガラス屋根(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

その後、「本館」の復旧工事の機会に建物の実測作業をもとに再び図面を復刻することとなり、昭和三年(一九二八)によつやく、『辰野記念 日本銀行建築譜』(写真)を刊行し当初の目的を果たしました。

「本館」復旧プロジェクト

「本館」建物は類焼による大きな損失を受けたものの倒壊を免れたことにより、早急な復旧工事を求められました。

復旧工事の設計者に指名された長野宇平治は復旧に当たり、建築界の指導的立場にあつた五人の建築博士(曾禰達蔵、中村達太郎、横河民輔、葛西萬司、塚本靖)〔注3〕を招集して修復計画を審議しました。

建築界の重鎮が一堂に集まり一年にわたる審議を重ねたことに、「本館」の復旧プロジェクトの重要性が見えます。この審議会の模様は「建築博士会議」として記録されています。

復旧工事は、二つの大きな方針に基づいています。一つ目は、外観をはじめ辰野設計の原形を踏

襲することです。その上で、被災により判明した不完全な部分について改良を加えることが二つ目です。

外観の改修では、鋼板葺きの寄棟屋根〔注4〕を取り除いて利便性に富んだ陸屋根〔注5〕に改修する案や銅板製のバラストレート〔写真6〕を防火性に強いコンクリート製の手すり壁に改修する案が提案されましたが、長野はかたくなに外観の保存を固持しました。ただし、類焼の苦い経験〔写真9〕から開口部の防火対策の強化に対しては、徹底的な改良を加えました。

具体的には、地震によつて焼失した正面のドーム屋根を鉄骨下地からコンクリート下地に改め、客溜上部のガラス屋根を防火シャッター付きの天窓に形状も含めて復し、さらに、窓のシャッターを内外二重の防火シャッターに改修したことがあげられます。

その他、類焼で耐力の低下した各階の既存の床はすべて撤去の上、より耐火性の強い鉄筋入りのコンクリート床に改修しました〔写真10〕。

内装についても木板張りの床・



写真12 上空から見た復旧後の「本館」(写真左奥の低い建物)。本館右奥の北分館はこの後、3階建てに部分取り壊し。昭和3年(1928)頃撮影。(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



写真11 仮設屋根で覆われた「本館」復旧工事(日本銀行情報サービス局所蔵)



写真10 「本館」3階事務室の復旧工事。内装のほか、床板・屋根も取り除かれています(写真3参照)。(日本銀行情報サービス局所蔵)

天井から漆喰塗り、石張り等の不燃材に改修し、暖房配管や電気配線をコンクリート内に隠ぺいするなど、徹底的な防火対策を施しました。

この改修工事は、地下金庫を使いながらのいわゆる「居ながら工事」を強いられています。屋根が焼損しているため、建物全体を仮設屋根で覆い、執務室スペースを確保するために、建物を半分ずつ使用しながら工事しました(写真11)。地下金庫に影響を及ぼすことは絶対に許されず、一階の床面補修等には細心の注意を払いました。

震災復旧工事は大正十三年(一九二四)十二月から取り掛かり、震災から三年以上の歳月を経た昭和の時代を目前とする大正十五年(一九二六)十月に完了しました。「本館」復旧に費やした工事費は最終的に一四〇万円近くに上りました。

こうした工事の内容をあらためて見ますと、今私たちが見ている「本館」は、明治期の姿のままの建物ではないということが分かります。外観は辰野金吾、内装は長野宇平治による、二人の合作

とも言えます。

「本館」は震災後に素早く立ち上げた復旧プロジェクトにより徹底した改良を施され、将来へ末長く生きる建物に生まれ変わりました。ある面では、震災でより寿命が延びたと見るのも過言ではありません。

震災後の北分館

北分館については外壁等に大きな被害を被ったものの、幸い建物内部の類焼を免れたこともあり、本館修復が終わるまで応急措置のみを施してそのまま仮使用を続けました(写真12)。

その後、損傷の著しい四階から上を取り壊して、一時的に三階建ての建物として仮使用を続け、昭和七年(一九三二)に本店増築計画の中でその存在意義を失い、すべて取り壊されました。

同じく工事中に被災した横浜正金銀行東京支店は大掛かりな補修を伴いながら昭和三年(一九二八)に完成し、後の東京銀行の本店として利用されました。また、丸ビルも震災改修を大正十五年(一九二六)に終了し、

平成の時代まで長くオフィスビルの象徴として親しまれていきます。

日本銀行本店建物として次世代の期待を担いながら、一〇年足らずで取り壊された北分館は薄命の建物でした。

今回は、本館修復工事に引き続いて行われた本店増築計画から今日に至る本店建物の変遷を紹介します。

(注1) 東京銀行(現在の三菱東京UFJ銀行)本店の前身。古典主義様式の建物として保存運動の中、昭和五十一年(一九七六)に取り壊され、現在の建物に至る。

(注2) 三菱合資会社と米國フラァー社により設立。二階に商店街を設け、弁護士・会計士・医者等多様な職能が入居する新しい事務所ビルとして東京のシンボルとなった。平成十四年(二〇〇二)に現在の丸ビルに建て替えられた。

(注3) 建築博士云議
曾禰達蔵 辰野金吾と工部大学校(のちの帝国大学工科大学、現在の東京大学工学部)造家(建築)学科の第一回同期として、また唐津の同郷として終生の親友。慶應義塾大学図書館等を設計。

中村達太郎 工部大学校造家学科卒業後、辰野金吾・帝大工科大学長の下で建築教育に専念。横河民輔 帝大工科大学明治二十三年(一九九〇)卒。鉄骨構造の草分け。旧三井本館、三越百貨店本店等を設計。
葛西萬司 帝大工科大学明治二十三年(一九九〇)卒。元日本銀行技師として「本館」建設に参画。辰野葛西建築事務所を主宰し、終生辰野の補佐役。

塚本靖 長野宇平治と帝大工科大学同期(明治二十六年(一九三三)卒)。「本館」設計にも関与。建築意匠裝飾の権威。
(注4) 四方に勾配屋根を持つ屋根形式。デザイン性と雨仕舞が良いため古来から多く用いられている。

(注5) 水平な屋根。人の歩行が可能な屋上として利用できる。「本館」の改修時に高射砲の設置を含め、採用が検討された。